

図書館の力 — 学生が輝くとき —

山浦 美幸
Yamaura Miyuki

須田 智里
Suda Chisato

抄録：学生が関わった図書館での活動を分析し、図書館におけるサポーター的活動が図書館に何をもたらし、学生に何をもたらしたかを考察する。

学生サークルFLCの活動に参加する学生14名にアンケート調査を行い、不明な点は聞き取り調査を行った。

キーワード：図書館ボランティア 社会教育 学びの拠点 学生ボランティア

はじめに

近年、公共図書館において「図書館友の会」、「図書館サポーターの会」といった図書館活動の支援をする団体が増えてきている。公共図書館がボランティア養成講座を企画し、そこで学んだ受講生が図書館で活動する際のグループ名として、友の会、サポーターといった言葉が使われる。そのため活動内容も「配架」や「破損本の修理」など職員の仕事の一部を担う存在になり、「図書館ボランティア」と同義のものとして定着しつつある。

また、『平成20年度社会調査報告書』¹⁾には、図書館におけるボランティア活動状況の調査結果が示されている。これには、“図書館ボランティア活動とは、対面朗読、点字図書の作成などで無償の奉仕活動をいう”と注釈がついているが、確実な定義は無償のという一点だけで、回答は各館の判断にまかされている。同調査で、ボランティア活動の登録制度のある図書館は、平成20年度調査で2110館あり、図書館数全体の約66%を占めていることが分かる。その中で団体登録制度のある図書館は1759館あり、「友の会」の活動も含まれている。

しかし「友の会」は単なるボランティアとは異なり「図書館の親友」と言われるように、図書館の応援団であり、図書館を基盤とした自主活動集団である。図書館ボランティアとしての活動のみならず、自立的で自主的な活動も求められる。今回、学生が取り組んだ図書館での活動を分析する事で、図書館の力を整理してみた。

1. FLCの誕生

学生サークルFLCは Future Librarians Club の略称で上田女子短期大学総合文化学

科の司書課程で学び始めた2010年度入学の1年生6名が立ち上げたものである。司書課程の授業での学生の意欲的な姿勢に、本学、木内公一郎准教授が、授業以外でも図書館のことを考える場としてサークルという可能性を示唆し、それに答える形で発足した。

FLCを立ち上げた学生に聞き取り調査を行った。特徴として司書資格の取得を目的のひとつとして、本学へ入学した学生が多いことが挙げられる。学生の司書資格取得希望の動機として、「読書が好きであること」「学校図書館で充実した時間を過ごした経験」「学校図書館司書に対する好感度」「図書委員の経験」などがある。

サークル活動を始める動機でも、「図書館に関わる活動がおもしろそうだった」とことが挙げられている。なぜ「おもしろそう」だったかについては、「本が好き」であること、そして「図書館のことを知りたいと思った」こと「司書の仕事に興味を持った」ことが挙げられている。活動を始めた学生は図書館に対して信頼感があり好印象を持っていたことがもう1つの特徴といえる。この好奇心を基盤としたFLC立ち上げの経緯は、その後の活動にも現れ、指示待ちの状態を作らず、学生同士が討議を重ねることで、サークルの骨格が作られ、活動の原動力となっている。

サークル顧問としてサポートした木内准教授は、学内におけるサークル活動の仕組みや必要な申請等、全員1年生という経験のなさがブレーキにならないよう活動を支えると同時に学生の意志を尊重し、あくまで見守る形で関わっていった。このため学生の主体性が生きる活動が生まれていく基礎ができた。

自発性に裏づけされた活動は、意欲と工夫を生み出し、自分たちの活動に関連する職業や行事への関心度が増していく。また、自発性が原動力になり、情報収集能力が高まることを実証した。

2. FLCの活動

① 活動の基盤

学生サークルFLCは2010年5月11日に発足した。その活動は、議論する場を作るところから始まる。新入生だけのメンバーで議論するには、各自の意見を集約し調整する以前に、本音でぶつかりあえることが欠かせない。その上で協調性と意欲のバランスをとる必要がある。そのために、共感できることを探し、信頼関係を深めつつ、方針を定め手法を工夫しなければならない。学生へのアンケートでも「話し合った」という答えが全員から出ている。この結果からみても議論の場はFLCにとって重要な部分だといえる。実際サークルの時間を見学しても、本題だけに集中するというより、脱線を繰り返しながら、信頼関係の構築、仲間作りの側面も同時に育んでいる印象がある。学生同士、上下関係がないフラットな関係の中で意思決定し行動に移すため、相互理解を深め個々の力を十分発揮していくことで、上級生がいない同学年だけの経験のなさを補っている。特に活動を立ち上げた初年度にこの特徴が顕著にみられる。

短期大学という与えられた時間が短い学生たちにとって、新入生ばかりの新しい出会いでも、躊躇せず動き出し、考えながら活動することが必要である。FLCは、その条件を充たすことで活動を開始した。

② 附属図書館での取り組み

最初の活動のキーワードは「図書館のお手伝い」というものである。「お手伝い」という言葉が選ばれた理由は、自覚しているか定かではないが、自分たちは司書課程で学び始めたばかりで未熟であるという意識である。そして役に立ちたいけれど、何をしたらよいの分からないという意思表示でもある。

顧問の木内准教授からFLCの意向を受けた本学附属図書館司書の須田は、2010年6月1日、発足当初のFLCメンバー8名全員と、初打ち合わせを行った。サークルの目標として「いろいろな人に図書館に興味をもってもらうこと」「附属図書館の利用者・貸出冊数を増やすこと」の2つが提示された。しかし具体的な活動内容まで整理されていなかったため、学生のイメージを具体化する課程で「図書館のお手伝い」をキーワードに書架整備を活動の基本として始めることにした。授業が無く、活動可能な時間の週間スケジュール表を作成し、各自週1回(90分)附属図書館で活動を開始した。書架整備は本のラベルに記入されている請求記号の見方、本がどのように順序付けされて配架されているのか、本の取扱方法、本を整えて棚へ置く仕方など、司書が学生に付いて指導しながら行った。その他、サイズの小さな本がきれいに書架に並ぶよう、棚の奥に設置する板を段ボールで作成。配架調整。蔵書点検のため、ハンディースキャナーでバーコードの読み込み。七夕の季節には笹飾りの作成と壁面装飾の作成などを行った。また、毎月『FLC通信』を発行し、メンバーは図書館所蔵の図書の中でテーマを決めて本の紹介をするなど、書架整備以外にも館内環境を整えること、本の情報を発信することによって、最初に掲げた2つの目標に向かって活動している。

1年間、このような活動をするうちにFLCメンバーの図書館の使い方には明らかな変化が見られた。まず目的とする図書を的確に見つけられるようになった。それは、司書から見ても驚くほどの進歩である。附属図書館内だけに限らず、公共図書館において行っている絵本の読み聞かせのボランティア(後述⑤公共図書館での取り組み。「図書館員と図書館員のたまごたちによるおはなし会」)で、子どもたちの希望に応じて絵本と一緒に探すことがあるが、普段使い慣れていない図書館においても図書を探す手際の良さは司書のそれに近いものがある。

司書にとっても、FLCと共に活動をする過程において館内整備や、利用者へアピールする図書館づくり、学生の要望など、発見や気づかされるが多かった。

③ 学園祭での取り組み

日常的な活動が定着しつつある中、その10月には学園祭に参加する。イベントとし

て、普段の活動内容から離れた企画をするサークルもある中、FLCは、活動の出発点からぶれることなく、「本」「図書館」に関連した展示を考えた。学生からの聞き取りから見えてきたことは、中学、高校での文化祭の経験と、高校でイベントの中核を担った文化祭実行委員等の経験を生かすことができた。完成した展示を見ても「本の紹介」をキーワードとしてまとめ、アプローチの仕方もひとつにならないよう考えられていた。具体的には 視覚的に訴えるよう、絵本の一場面をスタンドグラス風に表現したものを作成した。素材も黒画用紙とカラーセロファンを使ったものとガラス絵の具を使ったもので、各自の個性が生かされたものになった。他にも各自のお勧めの本の展示、附属図書館での貸し出し数の調査、『FLC通信』の展示など、それぞれが発信者となり、得意なことを生かせる場になった。

この時期の特徴は学生同士と一緒に過ごす「時間の長さ」である。全員司書資格取得を目指し、3分の2の学生が司書教諭資格の取得を目指しているため、同じ科目を履修し、常に一緒にいることになる。また半分の学生が同じ寮で生活している。このため議論の場がいつでも持てる状況が生まれ、相手への理解が深まり発想から行動への課程が短縮できた。短期間で信頼関係を築き、議論する場が充実した背景には、この「共有する時間の長さ」が影響している。

④ 塩田公民館での取り組み

本学のある塩田地区は、公民館活動が熱心に行われている地域である。学部長はじめ教員も公民館主催の講座の講師として地域活動に貢献している。そんな中で老化に伴い新たに建設された新塩田公民館が2010年4月に開館する。その開館記念事業の一環として2010年10月「みんなの本棚 ぼくらはみんな絵本でつながってる」が2日間の日程で開催された。

「みんなの本棚」は、公民館でしかできない絵本に関するイベントとして企画されたため、図書館ではできないことも可能にした。このイベントは実行委員会を置かなかったが、海外の子どもたちへの支援、料理、福祉、手芸、読み聞かせ、コンサート、国際交流、子育て支援など、性別や年代を問わず様々なジャンルの専門家が、絵本というキーワードで集まり、それぞれの専門分野からの切り口で絵本の可能性を提案した。企画を提供する側と来場者が一体となって展開することを目指した。それを実現するスタッフには、この趣旨を理解した幅広い年齢層の人たちを必要とした。

学生たちは、普段公民館利用者層として薄い10代から20代の代表として期待された。具体的な活動としては、学園祭で取り組んだスタンドグラス風の絵本を紹介した作品の展示。絵本『11ぴきのねこ』²のコロッケ、絵本『ぐりとぐら』³のカステラなど絵本に出てくるおいしいものを作って食べようという講座のアシスタント。様々な国のお茶をふるまった「インターナショナルカフェ」の裏方。など2日間手分けしてスタッフを勤める。面識もなく地元住民でもないため不安もあったようだが、うま

く溶け込んで活動できた。今回公民館の特性が前面にでた企画だったため年齢や性別だけでなく、ハンディキャップや国籍を超えたつながりを生み出していたことも疎外感を感じなかった理由になっている。

様々なプロに出会い、おとなの底力を感じたこと。おもしろいと思ったことを積み重ねていくことで力が生まれること。自分から踏み出さなければ発見もないこと。同世代だけの活動では見つからないものがあることなど学生の社会参加は学びの場となる。机上の計算ではない実体験の必要性が教育現場で注目されて久しいが、体験学習といわれる義務教育時代ではみえないものが、短大生という時期であったからこそみえることが今回の参加ではっきりした。この世代の学生だからこそ、人に役に立つことができるようになり、サポートやフォローをしてもらったことに気づき、自分の能力を客観的に判断できる。一般社会の縮図である幅広い年齢層や様々な立場の方とコミュニケーションをとり、役割分担することは、学生の自己実現に必要なことである。

⑤ 公共図書館での取り組み

「みんなの本棚 ぼくらはみんなつながってる」への参加経験を踏まえて、学生が公共図書館で活動する方法を考えた。公共図書館で学生が活動するには、まず公共図書館の職員と意識のすり合わせが必要である。附属図書館は学生が日常的に利用する学びの場であり、司書の仕事も学びの範疇なので、書架整備などの活動も授業の延長線上の意識が働いている。また附属図書館司書は、学生の学びに寄り添い教育するという意識がある。

一方、公共図書館は学生を受け入れる制度として、インターンシップがある。インターンシップは図書館員の仕事の仕方や働く場としての図書館を理解するためには有効である。しかし、学生は指示待ちになり仕事を教えてもらうという受け身の意識になり、公共図書館職員も日常業務の中に学生を組み込むことが重点になる。

そこで、学生の自発性を守り、公共図書館に学生ならではの力を感じてもらえ、公共図書館職員にも学生にもメリットが生まれる仕組みとして、「図書館員と図書館員のたまごたちによるおはなし会」を考えた。

現在、公共図書館において、おはなし会と呼ばれる読み聞かせなどのプログラムはどこの館でも行われている。しかしおはなし会をしていることが重要視されるにつれて、なぜおはなし会が公共図書館で必要なのかという基本的なことが置き去りにされがちである。そこで公共図書館のあり方を現在進行形で学んでいる学生だからこそ、公共図書館が行うにふさわしいおはなし会を運営できると考えた。

また、おはなし会は図書館の職員が行うか、ボランティアに任されるかの2種類が大多数だが、今回あえて職員と学生が共同で運営する形を選んだ。これは司書の仕事を理解し、図書館での企画運営の仕方を体験できるという学生側のメリットと、学生だからこそ効率を考えず納得いくまで手をかけ、利用者の視点を加味し、図書館でやっ

てほしいことを展開するという公共図書館だけではできないことを行うメリットを生み出した。

さらにこのプログラムでは、「図書カードをもっておはなし会へいこう」をキャッチフレーズにおはなし会の参加者が気になる本を探すお手伝いをしている。公共図書館はすべての人に開かれ、マナーさえ守れば本を読まなくても、借りなくてもいい場所ではある。しかし、公共図書館の存在意義としては、利用者に本を借りてもらうことを軽んじるわけにはいかない。そこで公共図書館でのおはなし会であるからこそ、参加者に図書館ならではの借りる楽しさを体験してほしいと考えた。

一方、参加者の希望を聞き、本を探す学生にとっては、直接利用者の声を聞く絶好のチャンスであり、分類法など、司書課程で学んできたことを生かし、学びの意義を再確認する場が生まれた。利用者とのコミュニケーションをとることで、サービス対象への意識が育ち図書館員としてのバランス感覚が磨かれる。もちろん学生の知識では対応しきれない場合もあるが、公共図書館職員と本学児童サービス担当の山浦、そして附属図書館の司書も参加しているので、サポートは万全である。

またこの活動の特徴は、月1回のペースで1年間継続することである。公共図書館でのおはなし会である以上、単発のイベントとしての形はふさわしくない上、公共図書館職員と共同の活動としての成果は継続してこそ得られるものである。そのため反省点を改善していく余地が生まれ、継続することの意味を感じることができている。反面、安定して参加者を集める難しさや絵本の知識不足、子どもたちとどう関わっていいのかわからず手持ち無沙汰になってしまうという、コミュニケーション能力不足といった問題点も浮き彫りにした。

3. 図書館ボランティアとFLC

FLCの活動を整理してみると、いわゆるボランティア活動的な要素も含まれる。そこで学生にアンケート調査を行い、学生の意識から考えてみた。図書館用語で、図書館の仕事を図書館サービスという。日本語では奉仕と訳される。そのため活動する者の意識としてボランティア活動との区別が明確になりにくい。学生もボランティアとの違いを意識していないと予測し、ボランティア活動への意識とFLCの活動についての意識を質問にいられた。質問にはできるだけ具体的に回答を求め、複数の回答がでるよう箇条書きで回答してもらった。

アンケート結果を図1、図2にまとめた。

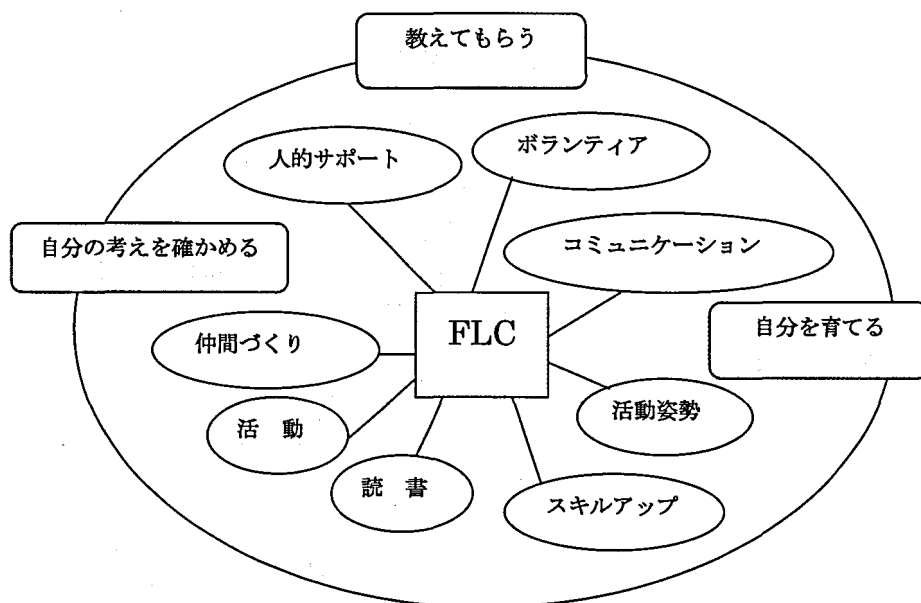
図1について。回答は様々な言葉で表現されていたが、概ね図のように「ボランティア」「コミュニケーション」「活動姿勢」「仲間づくり」「読書」「活動」「スキルアップ」「人的サポート」に分類される内容であった。この8つのカテゴリーに分類される内容によってFLCは支えられている。

図2について。FLCが学生のどのような意識によって構成されているかをまとめた。

図1 FLCの活動における学生の意識 (アンケート結果)



図2 FLC関連図



4. 学生が導き出したもの

ボランティアに欠かせないものとして、一般的にあげられるものは「自発性」「無償性」「福祉性」の3点がある。⁴ボランティア活動には、自己満足な行為に陥らずに、強制力も支配力にも影響されずに、自分から行動を起こすことが重要だといわれている。

FLCの活動を振り返ると「自発性」から出発し 体験を重ねることで徐々に「福祉性」相手のために行動することが身についていった。「無償性」に関しては学生という立場もあり、最初から有償で活動しようという意識がなかったため、問題になっていない。

FLCの活動が図書館ボランティアに似た印象があるのはこの「自発性」「無償性」「福祉性」の3点を含んでいるからである。

しかし、アンケートをしてみると学生が求めたものは単なる図書館ボランティアでは、収まらない独自性を感じる。

また、サークルとして発足しているので趣味の会という解釈も可能だが、「福祉性」というはっきりした自覚はないが、本の紹介などサークル内に留まらない活動を目指しており、自己満足でよいと考えていたわけではない。

FLCにおける学生の活動は、このサークルの命名に含まれていると考えられる。

「Future Librarians Club」学生たちが自分たちを未来の図書館員として位置づけることによって、活動の根底に志の芽が潜み、結果としてよりよい図書館のあり方、司書

のあり方を模索することになったのではないかと考えられる。

学生は言語化していないが、図書館が永続的に存在することを願い、自分たちが図書館を支持し続けることを行動で示している。

それが図書館の活動を学びたいという「自発性」を生み、他者にも図書館の良さを体験してもらいたいという「福祉性」を生みだしている。

効率優先で無駄を嫌う現代の風潮から学生も無縁ではいられず、学業においても手っ取り早く答えに行き着くことを考えがちである。現にきちんと授業を聞くより友達に答えを聞いて理解したつもりになる。課題や論文もインターネットで検索してコピーしてしまう。自分で考えなくても、覚えなくてもいつでもどこでもインターネットから答えを導き出せるような錯覚に陥っているという状況はいまやどの大学でも珍しいことではなくなりつつある。

経済的にも右肩上がりの成長は望めず、将来に希望が持ちにくいといった時代的背景もあり、理念をもつこと自体無駄だと思われがちである。ましてや創意工夫を凝らしても自己満足にしかならないというあきらめもある。

しかし、理念を持つことは、自分で考える第一歩であり、図書館に関わるものとしてぜひもってほしい姿勢である。それぞれが自分で考えていくことを大切にすることは、図書館が生涯学習の拠点として機能するために欠かせないことである。法律や行政の力だけでは図書館は変わらないのである。

「本が好き」「図書館が好き」という個人の好みから出発し、体験を重ねることでFLCは、自分で考えることを大切にしている図書館員として欠かせない感覚を学ぶ場になっている。

問題解決型の図書館が重要だといわれるが、問題解決には自ら考え、問題点を見つける力抜きには成り立たない。そしてそれは、文部科学省、新学習指導要領でいわれる「生きる力」の育成そのものである。

5. まとめ 図書館の力が生きる取り組み

FLCの活動から見てきたことは、図書館が学生の力を引き出し、学生が図書館の力を引き出すという双方向の働きがあることである。図書館は一方向的に学生を育てるわけではない。図書館の持つ利用者が判断し自分で決めるというプライバシーを尊重する側面と共同体の共有財産という側面が学生に自主性・自発性をもたらし、他者の利益を理解し様々な価値観を認め合う福祉性をもたらすことになる。

また図書館、特に公共図書館は元々情報の拠点として地域に根ざし、ネットワークを構築するという特色がある。学生が力を発揮させる要因として、学生が輝くための手助けができる人や場所へ導くことができる司書課程に関わる教職員の存在があげられる。関係した職員の人的ネットワークと情報収集能力が適材適所の相乗効果を生んだともいえる。インターンシップやボランティア活動など、学生の能力を開花させ、社会に適応さ

せる工夫がなされているが、今回明らかになったことは、「活動すること」が重要なのではなく「自分で考えること」が重要だということである。最近、とかくシステムが先行し「活動すること」がゴールになりがちである。今、学生にとって必要なのは、一緒に活動する集団をつくり、徹底した話し合いの場をもち、自分で意思決定し、創意工夫を凝らすことである。その延長線上に活動があつてこそ、そこでの体験が学びとして生かされるのである。F L Cの活動もはじめから「図書館ボランティア」を推奨しトレーニングをしたら、かえって「自発性」「福祉性」「無償性」がそろわず「図書館ボランティア」として不完全だったばかりでなく、現在のF L Cが行っている自発性に裏づけされた、自ら学び、自ら考える力を育成することにはならない。

また図書館の存在自体、自主性を基盤とした個々が考える場であることも忘れてはならない。

加えて、図書館の特性が学生を育て、学生の活動が図書館力を引き出すという状況が生まれたのは、本学に司書課程があること。学生に寄り添い自己実現のサポートを目指す特色を持っていること。そして、きめ細かい対応が可能な小規模校の利点を生かした教職員を配備していることによる。少人数で学ぶからこそ、学生の自発性を生かし、教職員が学生の考える時間を守ることを可能にし、学生主役の学びの実現をもたらした。

図書館は、生涯学習の拠点といわれ、学校図書館は「生きる力」を育む場だといわれる。それは図書館が一方的に利用者にサービスを与えるものではなく、今回のF L Cのアプローチのように総合的多角的に作用するものだからである。図書館において個人と同等に重要なのは他者への視点である。一人ではないからこそ、福祉的ともとれる作用が生まれる。

図書館の力は、複合的な動きがあつてこそより発揮される。その点で学びが生活の中心にあり、社会人への意識が芽生えている学生にとって、図書館は自主性を発揮させ、考える場として最適である。

学生の力は、図書館にとって経営方針を再確認し、未来の図書館の基盤を作る原動力となる。

-
- 1 図書館におけるボランティア活動状況。文部科学省。平成20年度社会教育調査報告書。日経印刷発行、2011、P.182-183。ISBN 978-4-9-4260-49-4。
 - 2 馬場のぼる。11ぴきのねこ。こぐま社、1967
 - 3 なかがわりえこ[著] おおむらゆりこ[絵]。ぐりとぐら。福音館書店、1967、27p.、
 - 4 淑徳大学エクステンションセンター編集。ボランティアの時代：「共生」の思想を考える。中央法規出版、2003、v, 161p. ISBN 4-8058-2346-1